仲間との絆づくりを基盤に、地域活動への参加者を拡大

滋賀県近江八幡市　近江八幡おやじ連

総務省「平成28年社会生活基本調査」によると、ボランティア活動への参加率の全国平均は26.0%だが、滋賀県はこれを大きく上回る33.9%で全国1位である。その滋賀県の代表的な地域活動団体が、近江八幡市の男性グループ「近江八幡おやじ連」だ。おやじ連は2006年に結成され、現在では24団体・350名が趣味や地域活動に精を出している。おやじ連の成り立ちや取り組み、地域活動の輪を広げる秘訣などについて、おやじ連のメンバーにお話をうかがった。

地域活動参加促進のポイント

- 入口は仲間づくり・居場所づくり。その場に集まった多くの仲間から地域活動に参加するメンバーが生まれる。仲間との強固な絆が基盤となり、地域活動団体への参加率が高くなる。
- 「自分が主役」という考えが基本。誰に強制されることもなく、自分の意思で活動に参加する環境をつくる。
- 事前予約などの手続きを必要とせず、予定表に記載された活動日・時間・場所に自主的に集まったメンバーで、できる範囲の活動を行い、楽しむ。
- 一度活動に参加すればグループのメンバーとして受け入れる。参加は強制せず、緩やかなつながりをつくることがメンバーの拡大と活動継続のポイントである。
- 活動を支える仲間のことを気遣える「協力者」を増やすことを重視する。
- 子どもたちを対象とした催しを開催することで、その父母や祖父母などを呼び込み、幅広い年齢層に会の活動をPRし、活動への関心を広げていく。
- 新たな仲間づくりの入口として、社会福祉協議会が開設している「地域活動相談所（地域コーディネーター室）」を活用している。

おやじ連結成の発端は市開催の料理教室

おやじ連が結成されたのは2006年だが、その発端は2001年にさかのぼる。

近江八幡市では、1965年から1975年頃にかけて新興住宅地が次々と開発され、そこに京阪神地域へ通うサラリーマンとその家族が定住した。彼らの多くは早朝に出勤し、深夜に帰宅する生活スタイルであり、地域社会との接点はほとんどなかった。「そうした男性たちが一斉に定年退職を迎えたらどうなるのかという課題意識から、市では2001年度より退職男性の閉じこもり対策、居場所づくり、仲間づくりを目的として、退職男性向けの連続講座『男の料理教室』がスタートしました」と、おやじ連代表の髙橋作榮さんは言う。

近江八幡おやじ連の代表を務める髙橋作榮さん。髙橋さんも3期目の「男の料理教室」に参加し、「おやじ友の会」という自主グループを結成した。

1期目の「男の料理教室」には30名の応募があった。そのうちの1人が、おやじ連の地域活動団体のひとつである「近江里山歩こう会」の代表を務める塩川和宏さんだ。「2002年の2月から3月にかけて、料理教室や健康に関するヒアリング、市内の名所・旧跡巡りなど計7回受講しました。普通ならそれで終わりになるのでしょうが、回を重ねるごとに受講者同士が仲良くなって、終盤になると『もっと続けたい』『講座が終わっても定期的に集まろう』という声が出始め、それに賛同したメンバーによって

最初の自主グループ『健康推進友の会』が発足したのです」と塩川さんは語る。

塩川さんら「男の料理教室」第1期生のサポートにより、2期目の講座終了後も「健康推進一五会」という自主グループが誕生し、それ以降毎年、自主グループができるようになった。

やがてそれぞれの自主グループは、市や社会福祉協議会（以下、社協）の事業にも協力し始め、グループ間の横のつながりも生まれてきた。また、どの自主グループの所属かに関係なく、参加したい人が定期的に集まって活動する地域活動団体がいくつも立ち上がった。そして、2006年、それら自主グループや地域活動団体がゆるやかなネットワークを形成する「近江八幡おやじ連」が誕生したのである。

安全で美しい里山景観の再生を目指して

おやじ連の組織構成について、髙橋さんは「がっしり絡み合う縦糸と横糸」と表現する。「退職男性にとって社会参加の入口は『男の料理教室』同期生による自主グループです。2002年から2016年までに16の自主グループが誕生しており、これがおやじ連の横糸です。一方、8つの地域活動団体が縦糸として生まれており、こちらはおやじ連のメンバーだけではなく、地域の誰もが自由に参加できるようになっています」

その縦糸の1つが、2005年に結成された「八幡山の景観を良くする会（八景会）」である。会の代表を務めるのは、村西耕爾さんだ。村西さんは、定年退職後に妻の実家がある近江八幡市に移り住んだ。「健康のために毎日八幡山を歩いていたのですが、荒廃竹林が広がり、コナラ林も常緑雑木や笹竹などに覆われて鬱蒼とした密林状態でした。八幡山をきれいにしたいとおやじ連の自主グループに協力を呼びかけたところ、賛同したメンバーが参加してくれるようになりました。現在ではおやじ連のメンバーが八景会の主軸になってくれています」

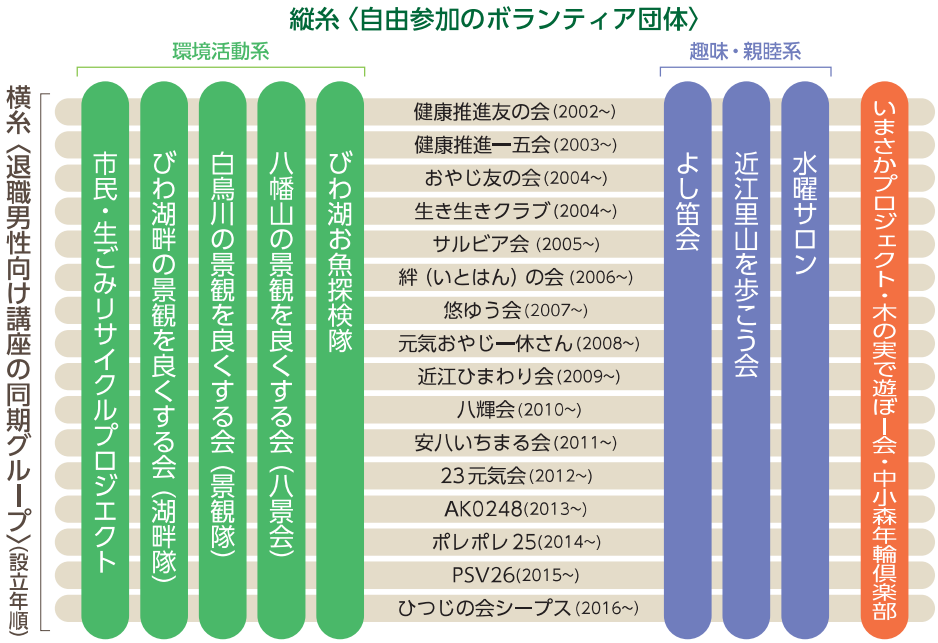
「近江里山歩こう会」代表・塩川和宏さん。塩川さんたち「男の料理教室」第1期生が自主グループを結成したことから、おやじ連の歩みは始まった。

八景会の設立から15年が経過し、最近では村西さんらが整備した縦走路は展望が楽しめるトレッキングコースとして広く知られるようになった。また、八幡山に親しんでもらうため、「小学校卒業記念植樹会」や「親子タケノコ掘り大会」などを開催し、市民が交流を深めている。

白鳥川の豊かな自然を次世代に引き継ぐために

八景会と同じく地域の環境整備に取り組んでいるのが、「白鳥川の景観を良くする会（景観隊）」だ。こ

〈組織構成の図〉



の活動は代表の吉田栄治さんの思いからスタートした。「定年退職後に白鳥川の川沿いを散歩していたら、自然の豊かさを実感する反面、雑草やゴミが非常に多いなと感じました。それで、白鳥川を少しでもきれいにして、子どもたちに豊かな自然を引き継いでいきたいと考えたのです」と吉田さん。

吉田さんもまたおやじ連の自主グループを訪ねて思いを伝えた。その思いに賛同したおやじ連のメンバーたちが集まり、2006年に景観隊が発足したのである。

発足当初は、土手の草刈りや不法投棄されたごみの回収などを行うのと同時に、桜の植樹にも取り組み、琵琶湖岸に至る全長5kmの白鳥川沿いに美しい桜並木を整備した。現在では、桜の時期に手づくりのぼんぼりを飾り市民の集いの場をつくっている。また学校と連携して子どもたちの環境学習を支援する役割も担っている。「活動が定着してくるにつれ、応援してくださる地域の人たちも徐々に増えてきました。最近では、働く世代の人も参加してくれるようになりました」と吉田さんは語る。

「がっしり絡み合う縦糸と横糸」が拡大の秘訣

新たな人材の確保に苦労している地域活動団体が多いなか、おやじ連はなぜ拡大を続けていけるのだろうか。その秘けつは、前述の「がっしり絡み合う縦糸と横糸」の「横糸」にある。現在も「男の料理教室」は社協の運営により開催されており、受講生たちはおやじ連のサポートを受けながら自主グループを立ち上げ、互いの親交を深めている。この仕組みによって毎年新しいメンバー・グループが加わり、おやじ連の横糸がまたひとつ増える。そして、その人たちがさまざまな地域活動団体という縦糸に自主的に参加するという流れができているのである。

「『こういう地域活動をしたいので参加してください』と言っても、つまり、縦糸だけをつくっても、なかなか人は集まりません。でも、その基盤にかけがえのない仲間とのつながりという横糸があれば、『八幡山をきれいにしたい！』と誰かが手をあげたとき、『あいつが言うなら手伝ってやろうか』『仲間が参加するなら、自分も参加してみようか』と人が集まってきます。それが、地域活動団体として拡大している理由だと思います」と、髙橋さんは言う。つまり、活動の入口となる仲間づくり・居場所づくりが大切で、その場に集まった多くの仲間から地域活動団体に参加してくれるメンバーが生まれるのである。母体となる仲間づくりの横糸に加わる人が増えれば増えるほど、地域活動という縦糸に参加する人も多くなる。しかも、仲間との強固な絆が基盤となり、地域活動への参加率を高くするというわけだ。

活動はメンバー一人ひとりが主役になって輝くためにある

もうひとつ、おやじ連が大切にしていることがある。それは、「自分が主役」であることだ。

多種多様な自主グループと地域活動団体がさかんに活動するようになったことから、おやじ連では2005年11月から全体の情報をまとめた月間予定表を作成し、ホームページや社協などで公開している。15年間、一度の休刊もなく月間予定表をつくりつづけてきたのは髙橋さんだ。

「おやじ連のメンバーは、この予定表に基づいて、誰に強制されることもなく、自分の意思で活動に参

八景会では、毎月第2水曜日・第4土曜日を定例活動日とし、八幡山の竹林・コナラ林、縦走路の整備などを行っている。

景観隊の定例活動日は、毎月第1・第3・第5水曜日。この日は、メンバーたちがぼんぼりづくりに精を出していた。

横糸のひとつである「近江ひまわり」会。月に１回開催する料理教室に仲間が集まる。

水彩画や紙芝居の制作などに取り組む「水曜サロン」。紙芝居の読み聞かせも行う。

加します。事前予約など面倒な手続きは必要ありません。予定表に記載された活動日・時間・場所に自主的に集まったメンバーで、できる範囲の活動をし、楽しむだけです。複数の地域活動に連日かけもちで参加する人もいれば、気が向いたときにたまに参加する人もいます。それでいいのです。『これでなきゃダメだ』と決めつけたら、グループも活動も成り立ちません。自主グループも地域活動団体も、メンバー一人ひとりが主役になって輝くために存在しているのですから」

一方、各地域活動団体の代表など活動を裏で支えるメンバーは事前準備に忙しい。「例えば、景観隊は雨が降ったら中止ですが、小雨で活動ができる場合も考えて草刈り機などを準備します。そんなふうに活動の裏で一生懸命準備している仲間がいると分かれば、『これぐらいの雨だったら行こうか』と気遣うようになります。参加者を増やすだけでなく、そういう視点をもてる協力者を増やしていくことが大切なのです。地域活動も、最終的には人と人との信頼関係があってこそですからね」

子どもを対象とした企画で、幅広い年齢層を呼び込む

おやじ連では毎年１月に「近江八幡おやじ連作品展」を開催している。これは、おやじ連の各自主グループやメンバー個人の作品を展示するとともに、各グループ・団体の活動を地域の人たちに広くPRすることを目的としている。2007年からスタートした作品展は、市民からもおやじ連メンバーからも好評を博し、現在では地域に広く知られる恒例行事となった。2020年１月に開催した作品展には128名・263点の出展があり、10日間の開催期間中の来場者は1,263名に上った。また、今年の作品展では、何人かのメンバーがつくっているスマートボールやシーソーゲームなどを集め、子どもたちが自由に遊べるスペースを設けたところ、その父母や祖父母など家族そろって遊びに来るようになった。作品展は、幅広い年齢層に活動をPRする格好の場となっており、作品展に来ておやじ連に興味を持ち、地域活動に参加するようになった男性も何人もいるという。

また、近江八幡市社協は退職男性の居場所づくりを進めるため、「地域活動相談所（地域コーディネーター室）」を開設しており、おやじ連のメンバーが地域コーディネーターとして相談に応じている。現在は、１か月に３名ほどが相談に訪れるそうだ。「おやじ連の強みは、地域で活動している団体を紹介するだけでなく、おやじ連の予定表を見てもらって興味のある分野があれば『何月何日何時にこの場所に来てくれますか？　私がいますから』とすぐさま活動を紹介できることです。そして、活動に来てくれたら、その人はおやじ連の会員というわけです」

2016年度から2018年度までの３年間、おやじ連への入口となる「男の料理教室」は応募者が少ないことから開催が見送られてきた。しかし、2019年度は40名という多数の応募があり、講座はすでに終盤に差しかかっている。もうすぐおやじ連に新たな仲間が加わることだろう。

近江八幡おやじ連WEBサイト▶